



## 多様性と正面から向き合う時代へ

園だよりが今月号をもって第60号です。こども園になって丸5年が経過したことになります。新園舎の建て替え中に新型コロナウイルスの猛威が始まり、日常の形が変わってしまいました。そんな5年間をひらりとかわして楽しく過ごしてきたぞう組のこども達がついに卒園を迎えます。卒園すれば次に待つのは小学校です。

しかし喜ばしい小学校入学には不安がつきまといます。我が子がうまくやっっていけるかを心配しない保護者はいないでしょう。小学校の環境はかなり特殊です。現場の先生方は必死に努力してくださっていますが、予算や人手の不足、そして変えづらい慣習があり、昔ながらの授業方針を取らざるを得ない学校が多いです。書くこと自体に抵抗がない子、書くことで記憶定着に結びつく子はいいますが、たとえば耳からの情報処理の方が合っている子にとっては板書中心の授業は非合理的と言えるでしょう。そして閉鎖的になりがちな人間関係は、大人でも苦手なひとが多いと思います。

つらつらと書き連ねて参りましたが、お伝えしたいことは、たとえ小学校が性に合わなくても気に病む必要は全くないということです。長い人生の中で一時的に置かれる極端に画一的な環境です。合わない子がひとりも存在しないとしたら人間の多様性が失われていると思います。たとえ合わない環境でもなんとかひらりとかわして生きていくしなやかさが、きっと子ども達の中に芽吹いています。

園長 山田